

京鹿子

本報創刊於十一月一日
第一七九號（每月一冊）



11月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十六



妻の手の温みを胸に霧の旅
山城の丹波一國霧を抱く
月草の涙ひと色を零しをり
露草の影を引き寄せ陵清し
カーブミラー残る暑さに里歪む
経緯を知る目撃者ゐのこづち

蓑虫の鳴いて貫く鬼ごころ
猫額の売地に咲くは蝨斯の恋
トレンディガール鶏頭の気色ばむ
落花生鷺掴みして二階の子

吟行・梨木神社

萩蝶の二頭に宿る公家遊び
巫女に問ひ風にも問うて萩のこと
萩むらに恋の一句を夜の宮
禰宜さんに尋ねる吉事萩月夜

近詠

和田 照海



厄日

せせり蝶来ては風遁遊女墓
夕涼や傾ぎ癖なる浮棧橋
試着室入りしままなる厄日かな
引つ剥がすガーゼの滲み蟬時雨
鶏頭退院のゆるぎなき緋を眩しめる

近詠

松本 鷹根



手ぶら旅

時雨来て頭上の鴉遠く呼ぶ
思ひ出に型あり蓮田枯れ易し
雁渡り空は広さを誇張する
天に向く蓮の実に触れ鳴る軽さ
穂芒と川の眩しい手ぶら旅

塩貝 朱千



蓮四日

緑蔭や円きホテルの円き庭
得度式終へて雛僧雲涼し
妙法や唯一無二へ献灯す
たゆたうて風と遊びし蓮四日
一番星探す窓辺のいなびかり

英華採集

天辺の尺取空を持て余す
ユーモラスな歩き方が特徴で指で長さを測るように見えることから尺取虫と呼ばれているが全世界で二万種以上も存在するとは驚きである。そして、木々の枝へ擬態することで外敵から身を守ること知られている。掲句は、自由気ままに木々を渡り歩く尺取虫の木为天辺へと向かうコミカルな動きが見えるも、天辺に登りつめた尺取の次の一歩が出せず困り果てた様子が「空を持て余す」にある。さて、尺取には糸を吐き出す技がありこの難を逃れたに違いない。

京都 梶野 興三

龍淵に潜む線状降水帯

京都 林田 紀子

春の季語に「龍天に登る」があるが、これは想像上の龍が春分の頃に天に登り大地に恵みの雨を降らす、とされ、そして、秋の秋分の頃になると天の龍は下界に降りて澄んだ水の中へと戻り水神として棲む、と言われる。これが秋の季語「龍淵に潜む」である。この季語をここ数年日本の各地を悩ませている大雨の異常気象用語である線状降水帯と合わせること、水神の龍の怒りを表現しているのではないだろうか？

秋風鈴丸く納める黙もあり

東京 犬飼 典子

風鈴は夏の季語として夏の暑い時期に清涼感を感じさせるものとして一般的に使われている。秋の風鈴とすると季節外れの感が強いが、風鈴の風に夏の終わりと秋を感じさせる。その代表的な句として「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」(蛇笏)があり、くろがねの重量感に風鈴の沈んだ音も見えてくる。掲句には何人かの集まりの場の雰囲気、気まずさを納める秋の風鈴の役どころがぴったりと嵌まっている、と言える。

秋うらら 沼田巴字

弔ひの字句美しや秋うらら
不揃ひな零余子の形限りなし
つつましく句碑一つあり石露の花
生きる哀しみ心に秘めて散る紅葉
肩寄せて生きる生かな萩白し

夜の静か 北川孝子

秋冷の夜のブランコに座す男
秋ざくらひと日せはしく過ぎゆけり
冬うららはや自論持つ六年生
生き下手はきつと死ぬまで夜の静か
晩年はかくもしづかに更け行けり

秋高し 植村蘇星

二度と無い今日を謳歌や秋高し
愚直に生きて晩学秋高し
秋深むすずめ色時一行詩
論ずべき時には論ず秋の暮
秋深し未完これありたなごころ

向日葵 直江裕子

灼け土に五分のたましひ落ちてゐる
八月の痛み片仮名増えてきて
百万本のひまわりにある負の迷路
隙あれば主義持ちはじむへくそかづら
それでも恋車千台灼けてゐる

杉の村 高木晶子

偲ぶ日の一本で足る白桔梗
石庭を結界として蟬の鳴く
遠雷や地縁血縁薄れたる
凌霄花登る力は杉の村
客人を幼子にする氷水

逝く季節 奥田筆子

子鹿起ち怒りの消えし川渡る
濁流やあつけらかんと鴨親子
鱗粉撒きプレタポルテの蝶昇天
千羽鶴詰められ晩夏の焼却炉
入道雲みるみる筋肉つけはじめ

夜の厨 伊藤希眸

鬼灯を唾へつ鳴らし下校かな
枯葉照りピアノ幾度もはね返す
庭隅より秋草の活く留守三日
秋草は夜雨に拵げダイズム
ぼつんと桃真夜の厨の卓にのり

初氷 井上菜摘子

紙飛行機またも枯野に出てしまふ
初氷無傷のものに触れられぬ
薄情かとふりむけば発つ冬の蝶
さざんくわは三面鏡を散りつづけ
モザイク画のさいごのピース冬仕上がる

神麓集

花 氷 村田あを衣

小六月 井尻妙子

自画像をかかねば消ゆる花氷
花氷溶けきつて知る濁世かな
花氷ふるる本音を聞きたくて
花氷 芯の語るは花言葉
花氷 吾が遠き日の花日記

父島も母島も晴れ秋高し
ハム二枚足して勤労感謝の日
大根をサラダにしてしまふ世代
この話どこで笑おう小六月
旅人のどのポケットにもどんぐり

記憶の欠片 山中志津子

月 代 鷺山珀眉

始発電車にばった飛びこむ無人駅
繭ほぐす生糸のやうな蓮の風
振花にドラマの台詞長すぎし
子の長所親の短所や冷酒酌む
星流れ記憶の欠片ふと疼く

いちにちを入れる引き出し晩夏光
月代の水輪池畔に消ゆるかな
恋ひとつ秋思に揺るる日のメモリー
三伏の石と語れば白き主語
青嵐絵巻は平家滅ぶまで

大時計 亀井福恵

茄子にしん 菊池和子

大時計秒は刻まず炎天下
うつしみに馴染みし畳青簾
踏切を追ひかけてくるはたた神
ここにして天下一枚アツパッパ
青すだれ御簪の国の隠し味

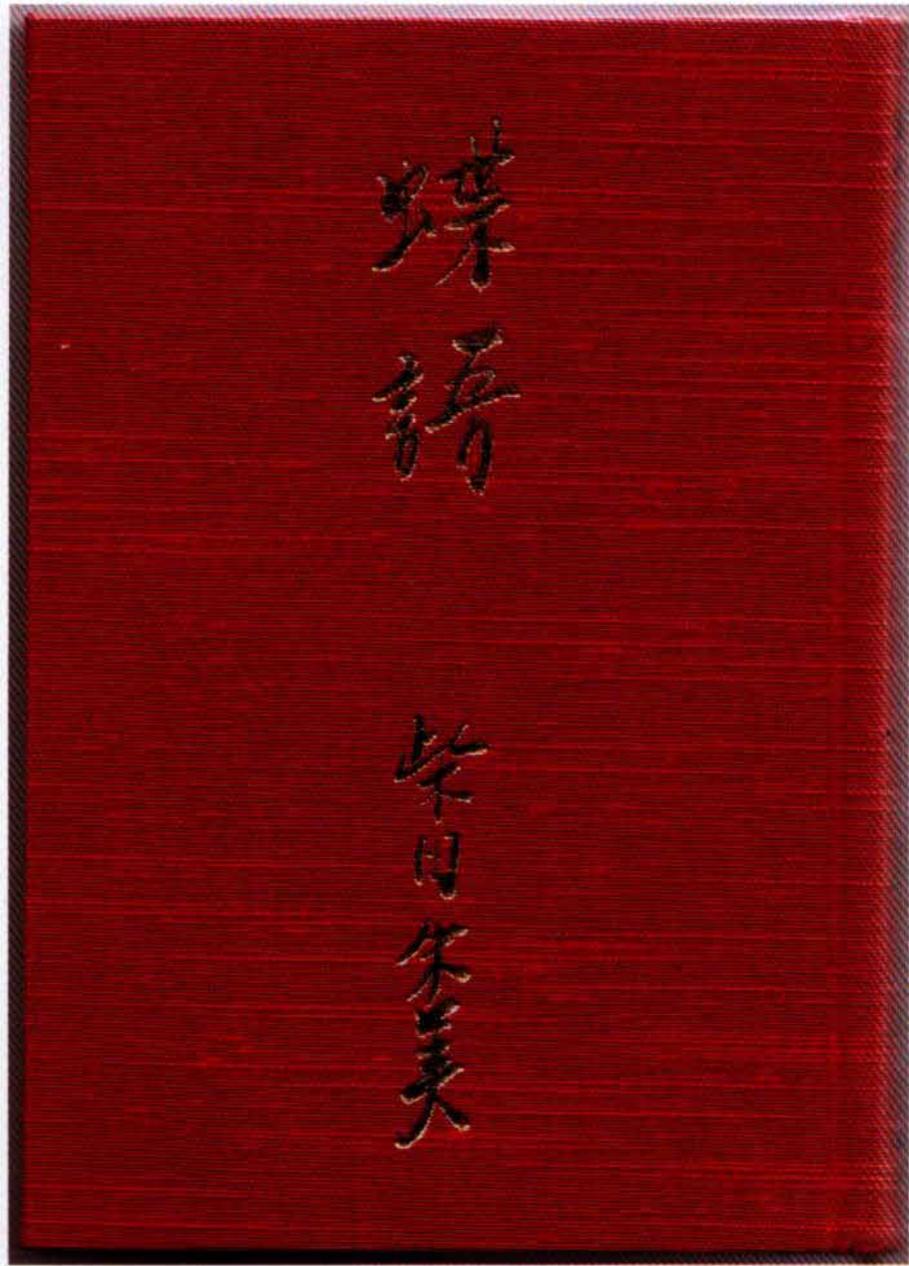
物干せば風の寄り付く夏の朝
万緑の光を握る赤ん坊
相性に縁と不思議や茄子にしん
留守勝ちの門前枇杷のよく熟るる
白蓮日暮はうしろ見せる池

雲 海 西村白杼

無限大 安田優歌

盆の月母と兄との雲遊び
大江山果てぬ雲海漕ぎ出さむ
ひまはりや少年迷路へ潜り込む
目が合うて話したさうな四十雀
周りにもねぎらふ言葉うす紅葉

空といふ無限大かな蟻は人
かなかなや詩に風あり涙あり
あやふきは今の吾が身ぞ桐一葉
夕闇の心に詩を草の花
宙の果てに墓穴あまたや夜の雷



柴田朱美句集『蝶語』

秋あかね 本郷 公子

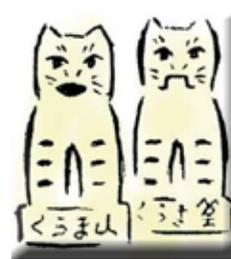
石庭へ自問の肩に秋あかね
銀輪のとまれば風もなき晩夏
メロン掬ふ銀のスプーンの透かし彫
動くもの夏の蝶のみ白砂の海
はたた神大和三山総なめす

峡の風 石原 孝人

秋夕焼丘に風飼ふ大銀杏
朝顔の蕾に畳む明日かな
風に舞ひ風につまづく秋の蝶
拝復と書いて磨る墨虫の秋
峡の風染めぬる雑木紅葉かな

マスカット 佐藤 千恵

夫病みぬ皿に乾きしマスカット
酷暑かな一枚ふゆる診察券
夏の月くづしてフェリー入港す
ひまはりも加はつてをり立ち話
白瓜やよそおはぬまま一日暮れ





京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

森は青葉十七文字の歩みかな

福岡 上原 玲子

タップしてラインの茅の輪くぐります

羽化せむと蟬一瞬の力かな

泣きわめく子にルビ振ればせみしぐれ

夏雲となれ白球一打夢一打

密談のやうに西瓜を食べてをり

福山 林 すみ

病みて知る夫のつよさよ百日紅

門火焚く仏の知らぬ家に住み

今朝秋の自在にしなふ手首かな

疲れ鶉の人見上げては潜りけり

習志野 上野 紫泉

真つ直ぐ生く男の刹那遠花火

無きはずの妬心かすかに夜の百合

居場所捜す月下美人の放浪

遠郭公ぼとり加齢の陰落す

夜の秋照らすコンビニ眠らない

連綿の文の結び目文字摺草

岡山 岸本 順子

きつかけは桑の実ひとつ食みてより

くらくらと翳が影追ふ夏の蝶

入道雲餓鬼大将の面構へ

淡あはとあさきゆめみる酔芙蓉

一行のわかれの言葉落し文

京都 大西 逸子

白桔梗潰えし夢を追ひて咲く

法堂へ長く涼しき聲

だいぢやうぶ母の口癖秋茄子

たかい高い笑顔はじける朱夏の嬰

香水のひとしづく広がる追慕

岡 温子

彩りを風の均すや夏木立

潮騒の二つの影や星の恋

打水や店の陶狸の生き生きと

荒縄の千年の美や銚を組む

天辺の尺取空を持て余す

京都 梶野 興三

北山の虹は片虹北の窓

尺取や高さ競ひし高層ビル

花氷騙されやすい優男

行人の眺めせしまの花氷

龍淵に潜む線状降水帯

林田 紀子

稲子炒る野づらの風を引き寄せて

だまし絵は騙し絵としてパセリの虫

戒名に朱を入れてより盆の風

野火のごと畦走り来るまんじゆしやげ

秋風鈴丸く納める黙もあり

東京 犬飼 典子

無になりて煙を見つむ送り盆

読み終へて心の騒ぐ秋灯下

秋草や弱虫を飼ふ意地つ張り

満月や白髪の子と観覧車

アソチ 伊吹 之博

帰朝かな晩夏の月のお出迎へ

片陰の祖父振り向きつ振り向きつ

喧嘩も吸ひたることく大夕立

子の何故に答へを急かす法師蟬